山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第24号(2007. 9)

学習規律の指導方法（１）

―― 学校長に「あの授業を参考にしなさい」と言わせた新任教師の授業 ――

桒原　昭徳

Teaching Method of Learning Rules (1)
―― A New Teacher's Lesson which a Principal Recommended by Saying "Refer to that Lesson"――

KUWAHARA Akinori
(Received July 20, 2007)

キーワード：新任教師、学習規律、伝え合う力

はじめに

2007年度の４月当初に新任教師として小学校に赴任して、４年生の一つの学級を担任しはじめた一人の女性教師がいる。それから２ヶ月と２２日目の公開授業における子どもの学習活動の事実をもって、その小学校の学校長に「あの授業を参考にしなさい」と言わせた新任教師とその授業に出会うことができたのである。

その日、2007年6月22日は、多くの公立小学校の子どもたちにとって新しい年度に入って約50日を過ぎた授業日にあたる。わが国の小学校が週五日体制に変わって以来、年間の授業日数はほぼ200日である。だから、この新任教師の授業での子どもの活動の事実は、１年間の４分の１の授業日数が経過した時点での出来事だということになる。

この授業の指導者である新任教諭、中田早紀先生は、2007年４月より鳥取県の本採用教員として鳥取市立美保小学校に着任して、４年２組の担任となった。国立大学教育学部を卒業したあと、本採用となるまでの２年間は、鳥取市に隣接する岩美町内の岩美南小学校および岩美西小学校の講師として学級担任を勤めた。講師としてのその２年間は、通年の学級担任をしているので、実質的には、経験３年目の教師と見なしてよい教師である。

１．校内授業研究会講師の依頼文書

中田先生の勤める美保小学校では、2007年度には、次のような研究課題を掲げている。それは「自らの生き方を追求しながら、伝え合う力を高め、望ましい人間関係を築く」である。同校研究推進委員会による「平成19年度校内研究の概要」によれば、「生き方」については、文部科学省の教育改革の重点項目でもある「生きる力」を視野に入れている。その「生きる力」を育てるためには、「ことば」や「交流」を通しての「伝え合う力」の育成が、今日の小学校教育の重要な課題であると理解しているのである。

あらかじめ届けられた６月22日（金曜）の校内授業研究会講師についての筆者宛の依頼文書（６月８日付）は以下のとおりである。この書類の中に、本論で取り上げることになる新任教師の授業公開も位置づけてある。書類中の＊印は、筆者の加筆部分である。

平成19年６月８日

山口大学教育学部
教授 桒原昭徳 様

鳥取市立美保小学校長　中 林 義 一

校内授業研究会の講師について（依頼）

深緑の候、先生におかれましては益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。
さて、本校では校内授業研究会を下記のとおり計画いたしました。
つきましては、先生にご指導をいただきたく思います。公務ご多用の折、誠に恐縮ですが、よろしくお願い申し上げます。

記

１　日　時　　平成１９年６月２２日（金曜）１０：００～１７：００

２　場　所　　鳥取市立美保小学校

３　内　容　　第４学年研究授業の指導助言
①　１０：００～１０：３０　　本校の取り組みについて（校長・教務主任）
②　１０：４０～１１：２５　　４年２組　算数「何倍になるのかな」
（希望職員が参観）
＊上記の授業が新任教師Ｎさんの授業である。
１１：３０～１２：２５　　桒原先生による指導助言（校長室）
＊授業者と新任教員指導教師のお二人に対して、桒原が助言した。
③　１３：４０～１４：２５　　４年１組　研究授業（全職員が参観）
学級活動「よりよい学級にするために」
④　１４：５０～１６：５０　　職員研修会
・講師紹介　　・自評　　・質疑応答
・指導助言（６０分）　※４年２組算数についての助言も含む。
・謝辞

４　その他　　学習展開案は後日お届けいたします。

２．新任教師の個人研究テーマおよび指導案の概要

配布された指導案の冒頭には、

＊個人研究テーマ　どうすれば自分の言葉で考え方を伝え合う算数の学習を創造できるか

と中田先生自身の研究テーマが掲げられている。そのあとに「研究テーマについて」と題

して、次のような説明が加えてある。.

自分の考えたことを表現することと、仲間とその考えを交流することをキーワードにして授業実践と学級経営に取り組みたい。算数科の授業実践では、数式のみならず言葉をどんどん使ってノートに書き、友達と活発に話し合うことで他者の考えを理解し通じ合っていくための授業のあり方や支援の仕方を研究したい。学級経営では、「ことばの力」を高めるための教室環境の工夫や学習習慣の徹底、話し合いの基盤となる学習集団づくりの方法について研究していきたい。

算数の考え方（論理）といえども、考えたことは日本語を使って、聞いてくれる相手に向かって分かるように発信しないと伝わることはない。中田先生は、「数式のみならず言葉をどんどん使ってノートに」書く活動を手がかりに、友達と話し合い、伝え合いながら子どもたちの力で「分かり合う授業」を目指している。学校の研究課題「自らの生き方を追求しながら、伝え合う力を高め、望ましい人間関係を築く」にも合致している。

当日公開された授業は４年生の算数科で、教科書の中の単元「何倍になるのかな」であり、具体的には次の文章題を解決することであった。

時計塔の高さは９０ｍで、これは役所の高さの３倍です。 役所の高さは、学校の高さの２倍です。 学校の高さは何ｍですか。

この文章題に対して、子どもたちは、授業の導入の場面で、いろいろな考え方でとこう」という「本時のめあて」を確認する。

指導案では、子どもたちの「学習活動」として、大きく次の４つの段階が記述されている。

１．本時のめあてを持ったあと、問題文を読み、解決の見通しを立てる。

２．見通しをもとに、自力解決する。

①絵や図をどのようにかいてよいのか分からない児童。

②立式できない児童。

③絵や図を描いて立式し、答えを見つける児童。

④２通りの考え方で説く児童。

（「順にもどしていく考え方」と「時計塔が画工の何倍になるかを考えてとく考え方」）

３．どのように解いたのか話し合う。

①始めに役所の高さを求めてから、学校を求める。90 ÷ 3=30、30 ÷ 2=15、<u>１５ｍ</u>

②時計塔は学校の高さの何倍になるかを求める。2 × 3= 6 、90 ÷ 6=15、<u>１５ｍ</u>

４．本時のまとめをし、振り返りをする。

以上が、授業者の計画した、おおよその授業の流れである。

３．授業の流れと子どもの学習活動の評価すべき事項

ａ．学習準備

桒原は授業開始時刻の６～７分前には校長室を出て、10 時 35 分に教室に入る。授業開始の５分前である。長休憩のあとの予鈴代わりの音楽が聞こえ始める。４年２組の子ども

たちの多くは着席して、学習の準備に余念がない。静かで、落ち着いた雰囲気である。

教師は、黒板に日付と授業の題名を書いた。それに合わせるようにして、子どもたちも教科書を開き、ノートに日付と授業の題名を書いている。書き終わった子どもの中には、教科書を読み始めている子どももいる。子どもたちは、チャイムが鳴る前から、すでに学習の内容と活動の中に入り込もうとしているのである。

授業指導に関する「新任教師の3つの悩み」として、従来から私は「遅刻・私語・忘れ物」を挙げてきた。この3つは、いずれも授業開始時での教師の指導の問題である。中田教諭は、6月22日の時点で、簡単に「新任教師の3つの悩み」をクリアしていることが判明する。(注1)

b．授業始まりの「自主管理」は日直の仕事

授業始まりのチャイムが鳴ると、日直の子ども（2名）が学級のみんなの前に出て、「立ちましょう」と声をかける。子どもたち全員が立ち上がる。日直が「これから3時間目の算数をはじめます」と合図すると、子どもたちは、きちんとした礼をし合って、着席する。

その間、教師は、何も言わない。いや、教師が言わなくても、子どもたちの力だけで、あたかも自動的に授業が始まり、自主管理ができているのである。これも、学習規律の指導の結果なのである。

c．文章問題を視写する

算数授業の始めには、日付と題名をノートに書いて授業開始の時刻を迎えた。授業始めの挨拶が終わると、すぐに本時の課題（本時は文章問題）を視写することになる。これは、子どもたちが算数授業のおおよその流れを意識していることを証拠立てる事実であり、子どもたちが自主的、目的的に授業に参加していることを示している。

教師が黒板に問題を書きはじめると、子どもたちも、すぐに視写を始める。文章を書き終わると、物差しと鉛筆を使って囲む。どの子も、集中して取り組んでいることが分かるし、真剣な表情である。

d．一斉音読の声と速さ

問題文を視写したあとは、声をそろえて一斉に問題文を音読する。この一斉音読には、学級の子どもたちの「授業の実力」が具体的に表われる。子どもたちの音読の様子を見ると、全員が声を出している、一生懸命に取り組んでいる、真剣な表情で読んでいる、意味を理解しながら読んでいるなどを、判断することができる。

中田学級の子どもたちの一斉音読は、全員の子どもが黒板を見て読んでおり、しかも適度のスピードと緊張感もある。4年生としては、十分な一斉音読である。

この一斉音読がすっきりとできるかどうかは、学習規律（子どもの側から見れば「学級の実力」）の定着のバロメーターでもある。

e．教師の問いに対する応答行為

みんなで問題文を読み終えたあと、先生が「この問題は、ズバリ何を答えたらいいですか」と問いかけた。これに対して、私語をしたり、私語的発言をしたりする子どもは、一人もいない。子どもたちは、すぐに挙手して応答しようとした。これも、初歩的な学習規律の定着を示す行動である。

しばらく時間をとったあと、教師が「あと、3人！」と言って、さらに時間をとって、挙手が増えるのを待った。

これとは反対に、子どもたちの数人が挙手すると、すぐに指名してしまう教師もいる。しかし、最も基本的な、この問いに応えられないならば、自力解決のスタートはきれない。考える時間を与えるとともに、みんなが挙手することを促す教師の指導言が、さらに問題解決への原動力を育てている。これも、どの教科・領域に共通する指名の仕方、つまりは学習規律の指導の問題なのである。

f．自力解決の場面では時間設定を

授業が始まって19分経過した時点で、教師は「はい、どうぞ」と言って、自分の力で問題を解くようにと指示した。子どもたちは、すぐにノートの問題に取り組んだ。一人一人が真剣な表情で取り組んでいる。約10分後に教師は、子どもたちの発表を促した。

この自力解決に集中する子どもの、取り組み方は姿で十分なのであるが、この上に教師が「何分で解けますか」と問いかけたなら、子どもたちは、それぞれ「5分」「8分ください」「10分で解けます」などの意思表示をする。できれば、子どもたちと話し合って「時間設定」をするとよい。さらに、子どもたちの「10分」という要望に対して、教師が「いや、7分くらいだね」などと提案しなおして、「時間の奪い合い」をすると、授業はさらに緊張感を増し、子どもたちの学習活動を促進することもできる。

様々な学習活動に取り組むときに、子どもといっしょに持間を設定すると、活動は、さらに促進される。どの教科・領域にも通用する基本的な指導技術の一つである。

g．黒板での発表の素晴らしさ

教師の「11時08分になったら、みんなで話し合おうね」という言葉で、話し合いの始まりの時刻が決まった。

子どもたちの中には、黒板に自分の考えを書き始めた子どももいる。

11時08分からのこどもたちの発表の内容と、発表の仕方が、この公開授業の圧巻であった。この「黒板での発表」については、本論の後半において、桒原から岩美西小学校長・山本正人先生宛ての手紙で詳述される。

h．二つの解き方に名前を付ける

子どもたちが2種類の解き方を説明した。その説明が終わった時点で、教師は「（解き方に）名前をつけて！」と、子どもたちに促した。

第1の解き方、「90 ÷ 3=30、30 ÷ 2=15」に対しては、子どもたちの中から、「わるわる方式」「ゆっくり方式」などが提案された 。第2の解き方、「2 × 3= 6 、90 ÷ 6=15」に対しては、「かけわり方式」「いっき（一気）方式」などの声が上がった。

この「名付け」をすることによって、二つの解き方の特徴を、大きく把握し、一般化する点がよい。学習規律のみならず、学習内容と学習方法への細やかな指導がなされている。

i．授業終わりに桒原の意見を求める

子どもたちの意見の伝え合いを中心にした活躍で、授業が終わった。もちろん、授業の終わりの活動も、日直の仕事である。いったん授業が終わったあと、中田先生は、参観者

の一人である栗原に向かって「栗原先生、子どもたちに指導をお願いします」と指名した。

栗原は、まず、黒板での発表の仕方が上手であったことを高く評価した。そのあと、黒板の隅に「腕の力こぶ」の絵を描いて、本日の「4年2組の授業の実力」を大きな力こぶで表現したあと、さらに外側に大きな「力こぶ」を描いて、「みんなの授業の実力を、こんなに大きくしてください」と語りかけると、子どもたちの中から「おお」と歓声があがった。この外部の人に言わせるのは、上手な指導方法でもある。

子どもたちの実施した授業に対する、文字通りの「外部評価」の場面である。公開授業の場も、子どもたちが「学級の実力」「授業の実力」を育てる場であると理解している授業者であるからこそ、筆者に指名したのである。いちばん遠くからの外来者の栗原に指名して、子どもたちの次の課題を明らかにするところは、授業実践者の意欲を感じさせられたところである。

j．子どもたちの「めあて」と「ふりかえり」の記述がリアルであること

後日子どもたちが授業のはじめにノートに書いた「めあて」と、授業の終わりに書いた「ふりかえり」の内容のコピーを届けていただくよう、お願いをしておいた。

子どもたちの記述の中には、次のようなものがあった。（最初の3人にとどめる。）

めあて	ふりかえり
①いろいろなことを発表する。	―――→いっぱい手をあげた。こんどは発表したいです。
②いろいろな図で、問題をときたいです。	→まちがえてくやしかったです。
③図をかいて、式もとく。	―――→説明をいっぱい書けたので，今度も頑張りたい。

子どもたちのノートの記述内容が、リアルであり、個性的な点を高く評価すべきである。

以上の点が、この授業の評価すべき、優れた点である。

4．校長室での指導講話

新任教師、中田先生が3時限目に授業を公開した直後の4時間目は、中田授業をめぐって講師役の栗原と、授業者本人、新任指導担当教師との話し合いの時間が持たれた。

つぎのような助言をすることになった。

a．正式採用になるまでの教師体験

栗原「本採用教師としての仕事は、この美保小学校が最初なのですが、昨年度、講師として勤務した岩美西小学校では、何年生を担任していましたか」。

中田「2年生で、寺西先生の隣のクラスの担任でした。だから、サイコロを使った掛け算九九の宿題＊なんかもさせてもらいました」。

＊この「サイコロを使った掛け算九九の宿題」とは、前年度、岩美西小学校の研修会において、栗原が提案した、2年生の子どもが自主的に取り組める家庭学習の内容であり、指導方法である。中田先生は、同学年のベテラン教師、寺西先生の指導を受けながら、この宿題を実践したとのことであった。

栗原「なんだなんだ、そうでしたか。あの寺西先生の授業は、見事な授業だったのですよ、はじめっから。もちろん、あなたも、その授業を見たよね。（はい）

じつは、山本校長先生に、初めて「岩美西小の研修会に来てください」といわれて、最

初に見たのが寺西先生の授業だったのです。その授業を見て安心をした私は、講演の中でも「先生方、あのような授業をしてください」といった授業だったのです。もちろん寺西先生も、ますます自信を持たれたろうし、子どもたちがよく動いていた授業であったと思います。中田先生は、講師の立場といえども、その隣の学級を担任していたのだから、いくら若い教師といっても、良い授業ができるはずだ。あなたは、昨年度が初めての講師だったのですか？」

中田「いえ、去年が、講師２年目でした」。

栗原「すると、１年目の講師はどこで勤めたのですか」。

中田「岩美南小学校でした。寺本校長先生でした。だから、２年間、岩美町内の小学校で過ごして、今年から正式採用になりました」。

栗原「そしたら、岩美西小学校で寺西先生の隣のクラスを担任しながら、学級経営や授業の仕方を学び、ついでに学校全体の研修会で私の話も、何度か聞いたね」。

中田「4、5回だったと思います。6月、夏休みのＰＴＡ研修、秋にももう１回、冬にもありました」。＊栗原は、Ｈ18年度の岩美西小および町内PTAの研修に参加した。

ｂ．子どもたちの発表の仕方のうまさ

栗原、新任担当指導教員の先生に向かって、

「じつは、先生、子どもたちが、黒板のところでの発表の仕方を、何人かで練習したでしょう。あれは、じつは、あるテキスト＊に書いてあることなのです。

＊栗原『わかる授業をつくる先生』(図書文化社、1997年刊)、109～116ページ。

それも、今日、上手だなと思ったのは、最初の子どもに発表させて、そのあと、先生がさらに上手なこどもに発表をさせたあと、もう１回発表をさせたでしょう。あそこが良かったのです。

教師というのは、漢字ドリルや計算ドリルは、何度も何度も繰りかえして子どもにさせるのですが、発表の仕方の練習は、意外と繰りかえして練習しないのです。発表は、１人の子どもに、１度発表をさせると、それ以上、繰りかえさせないのです。１人の子どもに繰りかえさせて、さらにもう３人の発表があったでしょう。あれが、とても良かったのです。

そして、先生が「今の発表は分かりやすかった、ハイ、拍手」と言って、みんなで拍手しては、発表の良さを認めていったのです。その結果、子どもの発表を聞いて「わかった」と挙手した子どもは、80％ばかりでした。先生の説明ではなくて、１人の子どもの、多数のほかの子どもたちへの発表（説明）が機能して、わかったという子どもが増えていっている事実が、「わかり合う授業」にほかならないのです。あれが、とても大事なのです。」

ｃ．すでに「新任教師の３つの悩み」は克服されている

栗原「そして、多くの新任教師が授業指導のうえで悩むことになる事柄が、あるのです。私は、それを「新任教師の３つの悩み」と呼んできました。その３つというのは、「遅刻、私語、忘れ物」なのです。これも、あなたは、何度も聞いたはずですよ。(はい)

まず、「遅刻」というのは、子どもたちが学校に遅刻してくることではありません。もちろん、先生が学校に遅刻したり、授業に遅刻してきたりすることでもありません。学校教育における教師の中心的な仕事である授業が定刻に始まらないという意味の「遅刻」です。

2番目の「私語」というは、授業時間が定刻に始められても、子どもたちの私語によって授業が支配されてしまって、先生の話が子どもたちの中に通らない状態を指します。

3番目は、授業に必要な学習用具の「忘れ物」が常態化してしまって、授業の中で展開されるはずの学習活動ができないことを指しています。

でも、中田先生の学級の子どもたちは、わりと早目に、この「3つの悩み」をクリアしたのではないでしょうか。それが、できたのは、いつごろでしたか？」

中田「いえ、忘れ物は、まだあります」。

栗原「そうだね。いろいろな事情に置かれた子どもや家庭がありますからね。

今日の授業の始まりのことですが、チャイムのなる5分前くらいから席について、すでに教科書とノートを机の上に出して、開いています。先生が、まず、「6月22日」と今日の日付と、授業の題名を書いていました。子どもたちは、この板書をノートに書きました。これが、大事なのです。つまり、先生がチャイムの鳴るまえに板書するものだから、子どもたちは、チャイムの鳴る前であるにもかかわらず「視写」できるのです。チャイムが鳴る前に、すでに気持ちの上でも、心構えの上でも、学習内容とかかわっていたということですね。現場でよく言われる言葉に「物構え、身構え、心構え」があります。構え（構える）とは、準備することです。物（ノートや教科書、筆記用具など）の準備だけではなくて、身（外部から見える身体の動き）としても準備されており、心（感じ方や思い方）の準備にいたるまでの、子どもたちなりの万全の準備ができているということです。

これも、岩美西小学校にいるあいだに学んだことでしょうね」。（ハイ）

d．日直の仕事が上手

栗原「そして、授業が始まるのとき「日直」の合図や声かけがあって、授業がきちんと始まりしました。これも、練習をしたんですよね。

じつは、この時期ですと、子どもたちが4年生になって学校に来はじめて50日が経過しますので、子どもたちは、授業のはじめに日直が合図をして授業を始めることに、習熟していました。このことが、実は大切なことなのです。

4年生ですと、1日に5時間の授業があったとしますと、授業の始まりが5回ほどあります。授業の終わりも5回ほどあります。これに、朝の会や終わりの会、給食の「いただきます」や「ごちそうさま」などの合図をふくめると、ゆうに10回は越えるのですが、最低限の1日10回の授業の始まりと終わりの練習をしたとしても、50日目の今日あたりですと、500回も練習したことになります。だから、上手になっておかなくてはならないのです。

ということは、500回も同じようなことを練習したのなら、すでに「子どもたちが自動的にできる状態」になっていなくてはならないのです。文字通り、自動的に（オートマチックに）、あまり意識しないでもできる状態になっておかなくてはならないのです。それは、授業始まりのマナー（manner）が、何度も練習をして行なった結果、あたかも「おはようございます」や「さようなら」などの挨拶の言葉と同じように、マンネリズム（mannerism）として身についていなくてはならないのと同じです。

d．黒板での発表の鮮やかさ

栗原「しかし、今日の算数の文章問題「学校の建物は、何mですか」の意味を理解し、

絵や図を描き、式を出し、計算をして、答を出すという活動は、子どもたちにとっては、初めてのはずです。

子どもたちは、授業の始め方や終わり方は、何度も繰りかえしてきましたから、慣れていて自動的にできますが、「学校の建物は、何mですか」という問題に出会うのは、初めてです。しかし、発表の仕方や聞き方には、慣れているのです。

つまり、学習の中身（学習内容）は初めて出会い、分からないことも多いのですが、発表の仕方などには、慣れています。これは、発表の内容そのものについては、分からないことも多いのですが、入れ物（容器）はしっかりとしているのです。学習内容として、何が入ってきても言語伝達ができるように、発表の仕方が鍛えてあるということです。

だから、子どもたちは、黒板のところに出ると、まず「聞いてください」と言っていましたね。そして、3人目か、4人目の子どもたちになると、「まず、こうして」、「つぎに、こうして」というように、順序だてて発表するような形も身につけていました。

また、聞き手の子どもたちに「等の高さは９０ｍですね」と問いかけて、「はい」という納得の返事の言葉を出してもらうような発表の仕方もしていました。

こういう発表の仕方が、きちんと何度も繰りかえされて、多くの子どもたちが身につけているということが素晴らしいのです。

黒板の前に出ても、恥ずかしがらないで、きちんとみんなの方を向いて話し、さらにきちんと指示棒の先で指して発表できることも、素晴らしい発表の仕方なのです。

そして、小さな段階に区分けして「ここまでは、わかりましたか」というように、聞き手に問いかけては、確認していくという方法も、上手に使っていました。

発表の仕方は、私のいう何段階目かは、確認していませんが、けっこう高い段階をしているのではないでしょうか。「みんな、数えてください」というように、聞き手に答えてもらうような最後の段階も、もうすぐできるでしょうね。聞いている子どもたちが、まずは「はい」という返事をすることができますから、答を言うことも、教師が考える以上に簡単にできると思いますよ。

発表の仕方については、よくできています。ますますレベルの高い「発表の仕方」を身につけるとともに、最終的には、その場面にふさわしい発表の仕方、その子どもらしい個性的な発表の仕方になっていくでしょう。」

ｅ．子どもから「算数的厳密さ」も出されるように

「それとね、新任の先生で、あのくらいできればいいのですが、せっかく右の小黒板に塔の絵（教科書の挿絵コピー）が掲示されていたでしょう。（はい）せっかく準備したのだから、あれを利用するといいのです。そのときに、子どもたちの中から、このような意見が出るといいのです。

たまたま先生が掲示したときに、先生の手があたったかして、3つの建物の下の線がずれてしまいました。高さを比べるのだから、下の線は、そろっている方がよいのです。

＊比べること、比較することをドイツ語で「vergleichen（フェアグライヒェン）」といいます。この言葉が教えてくれる「比べる」ということのもともとの意味があります。じつは、この「vergleichen」は「ver」＋「gleichen」で成り立っています。「ver」とは、英語の「make」の意味があり、「～させる（～する）」という動詞をつくる接頭辞です。その

つぎの「gleichen」は、じつは「gleich」、つまり平等だとか、同等だとかの意味なのです。ですから、この「vergleichen」とは、もともとの意味は「平等化する、同等化する」という意味なのです。つまり、子どもたちの身近な生活の中にもある「背丈を比べる（比較する)」ためには、同一平面上の床の上に立つという同等化をしなくてはならないのです。

つまり、理想をいえば、子どもたちの中から、「先生、この下の線は揃えておかないといけません」と言えるような「算数的な厳密さ」をも含むような意見が出てくることです。

そして、先生としては、あの高い塔が石造りなのか、セメント作りなのか、木でできているのか、などは問題ではなくて、この問題では、高さが大事なのだということも、触れていいのではないでしょうか。

さらに、その絵から高さだけを写し取って、１本の縦の線で表わしたら、もう絵はなくてもよいのかもしれません。もちろん、市役所の絵も、最終的には学校の絵もいりません。それぞれの建物の高さが、１本の線で表わされて、さらに数字（数値）として抽象化されるのが、算数･数学的な考え方ということでしょう。

すると、「もう、この絵はのけて、線だけで、考えられるよね、いいよね」と言って、これが９０ｍ、これが学校の３倍というのだから、学校の高さはどうすれば出るかな。式が立てられるかな。９０÷３＝３０だから、この線で言うと、これが３０ｍなんだ。もう絵はいらない。学校は、役所の半分だから、役所÷２で学校が出る。

この線を利用して、近づけて、結局、塔の高さの６分の１が、学校の高さだということが、３つの線の上でもわかると良いし、説明できると、もっと良いのです。

つまり、せっかく教科書の拡大コピーをしたのだから、それも使って、いろいろな解き方や、説明の仕方ができると、もう言うことはないのです。

絵そのものは、子どもたちのイメージに残ったら、もう除けたらいいのです。板書というのは、授業の始めから終わりまで一緒でなくても良いのですよ。図画工作ではないのですからね。

ははあ、なぜ「÷６」なのか、この３本の線で説明できる人はいないかなあ。まずは、一人ができればいいのです。そして、同じような説明をしては慣れていき、だんだん説明できる人が多くなれば良いのです。」

ｆ．教師が一段階上の「鮮やかな発表」をして見せること

栗原「そして、最後に、先生が、子どもたちの発表よりも「一枚進んだ（一歩先の)」発表の仕方をして見せることです。これが、指導の授業なのです。

さらに、いちばん発表が不得意な子どもにも、チャンスを与えることです。慣れると、できることですから。そんな不得意な子どもの場合には、他の子どもたちが力を貸してやることです。この子どもたちに対しては、問題文を音読したり、計算の答を言ってあげたり、「ハイ」という返事もていねいに言ったり、などのように気持ちの上でも助けることはいくつもあるのです。「ここまではいいですか」と、その子どもがたずねたら、大きな声で、次の言葉を促すような返事だってできるのです。

結局、この学校の高さの６倍が塔の高さになります。その「６」という数字は、「この３と２をかけたらでます」というのが、３本の線を使って説明ができたときに、二つの考え方のすべてが理解できたということになります。

そうすると、子どもたちの言葉で言えば、「わるわる方式」もできたし、「かけわる一気方式」もできたことになります。

最後に、先生が「だれか、いちばん上手な発表に挑戦してみて」という試みもいいのではないでしょうか。そのあと、先生も、そのうえのレベルに挑戦する。これが「指導の授業」なのです。

たとえば、指名されたあと黒板のところに出るときの歩き方だとか、指示棒で指し示すときの棒の先が、動かないで、ピシッと止まっているとか、ニコッと微笑んで発表するとかね、やることは、まだまだあります。つまり、子どもたちが、まだできていないことを教師の方が何でもやれば良いのです。ということは、子どもたちが、まだしなくてはならないことを、先生が「指さし導く」ことです。これが「指導の授業」です。

それと、あの授業の中で、これを指導したら、すぐに良くなるということがあります。それは、「さあ、問題を解きましょう」というときに、教師が「この問題は、何分で解ける？」というように、子どもたちといっしょに時間設定をすることです。(既述)

５．講師時代の学校長への手紙（桒原より）

新任として勤めはじめた新しい小学校の学校長が「あの授業を参考にしなさい」と言われた事実、そして、その言葉に相応した中田先生の授業の事実を前にして、私は大いに感心することになった。なぜ、新任教師に、このように子どもが活動する授業が実践できるのか。その大きな理由は、新任として着任する前の学校での「研修」にあると直観した私は、中田先生が講師時代に勤めた学校の校長先生に向けて、次のような手紙を書いた。

ＦＡＸ　０８５７－○○－○○○○
鳥取県岩美郡岩美町立岩美西小学校
山本正人校長先生

山口大学教育学部の桒原昭徳です。
さる６月１４日（木曜）の岩美西小学校の校内授業研究会では、お世話になりました。

次の週の２１日（木曜）は同じ鳥取県内の日南町立石見東小、翌２２日（金曜）が鳥取市立美保小学校の校内授業研究会でした。

２２日の３時限目には、昨年度、岩美西小で講師として学級を担任されていた中田早紀先生の授業を参観することになりました。

授業は４年生算数の「何倍になるのかな」という題名の授業で、次のような文章題を解く授業でした。

「時計とう（塔）の高さは９０ｍで、これは役所の高さの３倍です。
役所の高さは、学校の高さの２倍です。
学校の高さは何ｍですか。」

子どもたちは、10分間の「自力解決」のあと、発表をしはじめました。
このときの、黒板での子どもたちの発表が、じつに鮮やかだったのです。

私のメモによれば、子どもたちは素早く黒板のところに出て、聞き手の子どもたちに向かって、次のような発表をしました。

「塔の高さは、９０ｍですね。（聞いている子どもたち「ハイ」と応える。）
９０÷３＝３０で、３０ｍが出ます。ここまでは、いいですか。（ハイ）
これを２でわると、答が出ます。３０÷２＝１５で答が出ます。」

「聞いてください。塔の高さは、９０ｍですね。（ハイ）
この９０ｍは、最初は倍にしていたけど？、その反対に割って、９０÷３になります。
３０÷２＝１５になります。
だから、こたえは１５ｍになります。どうですか。（いいです）」

「聞いてください。まず、塔の高さは９０ｍですね。（ハイ）
でも、この９０ｍは置いといて、２と３（２×３）は６倍です。
さっき置いておいた９０ｍ÷６＝、答は１５ｍです。だから、答は１５ｍです。」

私にメモは、算数の内容を書きとめるだけで精一杯でした。子どもたちの「発表の仕方と聞き方」、つまり言語コミュニケーションは見事なものでした。

３人目の発表の直後に、中田先生は「わかった人？」と、クラスの子どもたちに対してたずねました。およそ８割の子どもたちが挙手しました。
まさに、お互いの発表を聞き合いながら、わかって（理解していった）のです。
そんな見事な授業でした。

授業の終わりに「栗原先生、意見をお願いします」と、授業者の中田先生から指名をされたので、私は、まず子どもたちの黒板での発表の仕方のうまさをほめました。また、話の終わりには、いつもの「腕の絵」を黒板に描いて、ますます「学級の実力」、「授業の実力」を大きくするように子どもたちに伝えました。
子どもたちは、大いに喜んでくれました。
この中田学級の子どもたちが、どこまで伸びていくのか、私も楽しみにしています。

この中田先生の授業は、全員が参観する授業ではありませんでしたが、自主的に多くの先生方が参観されていました。

美保小学校の中林校長先生が校長室で私に教えてくださったことですが、新任教師の授業にしては、大変しっかりと指導がなされているので、ベテランの先生方にも、
「あの授業を見て参考にしなさい」
と言ってきたということでした。
４月から担任してきて、およそ５０日目くらいでしょうか、子どもたちの算数学習への真剣さや真面目さまでも感じることのできる授業でした。

あとで中田先生の話を聞くと、昨年度の１年間は研修のチャンスに恵まれて、４回も５回も繰りかえして栗原の話を聞いてくださったということでした。
その上に、岩美西小学校での同学年のおとなりの学級の先生が寺西先生であったことも、中田先生にとっては幸運ではなかったでしょうか。

つい昨日、ほかの学校の先生方に手紙を書く機会があって、新任の中田先生の授業の中での子どもたちの活動の素晴らしい点として、次のように説明したことでした。

新任の先生の授業で立派だなと思ったのは、
○学習の始まりが日直によって、手際よく開始されていること。
○学習準備は、教科書を開き、ノートに日付けと本時の題名が書かれていること。
○ということは、教師が授業のチャイムが鳴る前に、日付と題名を板書していること。
○授業への構えや姿勢ができていて、子どもたちの真面目さや本気さが感じられること。
○子どもたちに黒板での発表のチャンスを与えて、何人かに練習もさせていること。
○発表の聞き方にも「はい」という返事がなされ、子どもたちが習熟していること。
○文章題を読むときの「一斉音読」が上手になっていること。
などなどでした。

たしか岩美西小学校に私が初めておうかがいして最初に参観したのが寺西先生の授業でした。ベテランらしい授業指導の基礎基本の押さえられた授業でした。その日、初めて私の授業指導の理論についても聞いてもらったことでした。
実質１年間の「授業の理論と実践」についての勉強をすると、たとえ新任の先生でも、初めての学校の校長先生が感心するほどの授業ができるということに、私の方がつくづく感心したくらいでした。

じつは、今年度の美保小学校の４年生のほかのクラスの先生方の中には、広島県から派遣されて研究主任を務められている先生や、附属小学校で理科専科を担当してきた先生もおられて、どうやら中田先生は、新任１年目の今年度も、たくさんのことを学ぶことのできる環境におられるようです。
ますます理論勉強もされて、まずは一人前の教師を目ざし、いずれは保護者からも、同僚教師からも認められる「授業のプロ」に成長されることを期待しています。

私の方、美保小学校校内授業研究会での午後の講演の中で、いつもお話しする「２＋３＝」の発表の仕方も説明しました。中田先生が、午前中の授業の中で実際にうまく実践されていたものですから、美保小学校の先生方が、じつに本気で聞いてくださったことでした。

山本校長先生、現場での実際の授業を公開しながらの授業研究は、やはり、しつづけなければならないもののようですね。
大黒教育長さんにも、どうか、よろしくお伝えください。

少し時間がありましたので、詳しく書かせてもらいました。

２００７年６月２４日、１４時３５分、
日曜日の山口大学教育学部の研究室にて　　（　署　　名　）

６．校長先生からの手紙

６月２５日（月曜）９時３３分、中田先生が前年度に講師として勤務された小学校の校長先生より、次の手紙が送信されてきた、

山口大学教育学部
教授　桒原昭徳様

前略。６月１４日（木）の美保小学校、中田教諭の授業研究会、ご苦労様でした。たびたび鳥取県へおいでいただき、ご指導いただいていることに感謝申し上げます。

さて、中田教諭ですが、本校に勤務していたころから意欲的に学級・学習集団づくりに取り組んでいました。特に、学習規律、学習内容については、たびたびどのように指導したらよいかを寺西教諭をはじめ、先輩教諭によく尋ねていました。昨年１年間で「学級の実力」をアップするノウハウのようなものを感じ取ったのではないかと思います。４月下旬に出会ったころは、学級通信が思うように発刊できないので、保護者との連携に少し悩んでいたところがありましたが、学校での指導で、保護者の信頼も得つつあるのではないかと思います。本当に、すばらしい授業をしたということで、うれしく思っています。また、美保小学校のＮ校長にも電話しましたが、ほかの先生へ良い影響を与えたということで、美保小学校の先生方の指導力向上に役立ったことと思います。

このような話を聞くと、本校の指導力向上のための研修や教育実践が、子どもの学力の向上を図るために有効であることの実証になるのではないかと思ったりもします。桒原先生がおっしゃられるように、本校では、学習規律の学力、学習方法の学力、学習内容の学力を、１時間ごとに明確にしながら授業を構築していくことで、「わかる授業」ができていくと考えています。それは、具体的に１時間の授業では、どこに現れ、どう指導しているか。その結果はどうか。また、ふだんの生活では、どのように指導しているのか。このようなことを日々考え、先生が指導していくことが最も重要ではないかと思います。さらに、こうした学級の取り組みを保護者・地域にも知らせ、協力を得るようにすれば、子どもの変容はさらに大きくなるとともに、早くなります。なにか、中田先生が実践で実証してくれているようで、うれしい気持ちでいっぱいです。

本校の実践は、桒原先生のご指導の賜と感謝申し上げます。今後ともご指導をよろしくお願いします。

先生は、山口大学の講義、他大学の講義、現場の指導と、ご多用の毎日をお過ごしのこととお見受けします。これから暑い季節がまいりますので、ご自愛ください。

文書で失礼かとは思いますが、お礼まで。　　草々

２００７年６月２５日（月曜）　　岩美町立岩美西小学校長　　山 本 正 人

７．新任の中田先生からの手紙と資料

７月２日（月曜）に、授業者の中田先生より、つぎの手紙が大学に届いた。

栗原昭徳先生へ

先日（6月22日）は、ご多用の中、私の授業を参観していただき、その後もいろいろなアドバイスをいただき、本当にありがとうございました。

昨年１年間、数回にわたって栗原先生に講義をしていただいていたので、１年間で学ばせていただいたことを少しでも授業の中で生かすことができれば……と思い、授業をしました。

子どもたちは、当日、とてもよくがんばったと思います。発表や手を挙げることも、意欲的にやってくれました。「声が小さい」というのが、子どもたちの課題なのですが、それでも、大きな声を出そうという意識や、発表しようという意欲が見られて、私もうれしかったです。人数が多い中で過ごしてきた子どもたちなので、

「今まできっと、発表しなくても、自分の意見を持たなくても、その場にいれば時間が過ぎていった」

と、ある子どもが言っていました。その意識を変えることから始めたのがよかったのかなと思っています。

私自身も、あまり緊張せず、楽しくできました。それは、前日までに同学年の先生方や指導教官の先生にいろいろなアドバイスや指導をいただいたからだと思いますし、昨年、岩美西小で寺西先生や校長先生、その他たくさんの先生方、そして栗原先生にご指導やご助言をいただいたからだと思っています。

また、今回の授業で課題も見えてきました。

一つ目は、ノート指導に関することです。同封させていただくために、子どもたちのノートをじっくり見ましたが、字が乱雑で、丁寧に書こうとしている児童や、分かりやすく説明を書こうとする児童が少ないなということを思いました。また、「目あて」に対する「ふり返り」をしていない子も何人かいます。そのあたりのことを、これから指導していきたいと思います。

二つ目は、私自身のことで、発問を何度も言いかえたり、言い直したりするくせがあるようです。一つの発問でじっくりと考えさせることをしていかなくては……と思います。

授業後に、寺西先生から電話があり、「栗原先生から岩美西小の方にファックスが届いたよ」とのことでした。山本校長先生が、とても喜ばれて、岩美西小の全職員にコピーして配布されたようです。私も、岩美西小は教師生活での母校のようなものですので、とてもうれしく思います。ありがとうございます。

また、黒板に描いていただいた「力こぶ」の絵も、さっそくカメラに撮って、掲示しました。「黄色の力こぶになるように実力をさらにつけていこう」と意欲マンマンにがんばっていこうと思っているところです。

全国を巡られているということで、体調など崩されませんよう、健康には気をつけてください。またお会いできる日を、楽しみにしています。

平成１９年６月２９日　　鳥取県鳥取市立美保小学校　　中田　早紀

８．おわりに

新任の中田早紀先生が、ベテラン教師をふくめた同僚教師に向かって「あの授業を参考にしなさい」と学校長に言わせた陰には、中田先生自身の「確かな授業指導力」があったことは、まぎれもない事実である。私の目と勘で、実際に確かめた事実である。

もう一つ、この新任教師の「授業指導力」を育てた学校、すなわち学校長があり、研究主任があり、同学年の学年主任をはじめとする教師があることを忘れてはならない。現場教師の「生涯通用するような授業指導力」は、現場での研修の中での理論学習に支えられた授業実践の公開と協議の中でしか育たない。中田授業の事実は、私に、その意をさらに強くさせてくれる。

さらに、中田学級の子どもたちの活動の中には、本気で学習に取り組み努力する雰囲気や、真面目さ、誠実さまでも感じとることができた。そこには、算数の知識と認識を着実に獲得していく確かな「陶冶過程」があり、同時に真面目さや誠実さを育てる「訓育過程」の両輪が備わっている。「人間を育てる授業」であることがうかがわれる。この点の解明は、私自身の今後の研究課題である。

注

１)「新任教師の３つの悩み」は、教職体験を重ねることで解消するわけではない。筆者は、教職体験 20 年余りの学級担任の小２の学級で「学級崩壊」が起こり、定年をむかえる学級担任の小２の学級が「騒がしい学級」となっている事実にも遭遇した。

それらの学級の崩壊や荒れの実態や克服の手立ての詳細は、以下で論述している。

桒原昭徳著『学習規律を育てる』近代文芸社（東京）、2007 年４月刊。

桒原昭徳「授業改善、60 歳ベテラン教師への提言（１）（２）」山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第 23 号、１～ 16 ページ、17 ～ 31 ページ、2007 年３月。